

著書, 学術論文等の名称	単著, 共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(著書) 1 写真と図解によるバレーボール	共著	1988.4	図書文化社 A5判 総頁数 231	(編著者) 大石三四郎他、8名 (担当部分) 第1章第3節「バレーボールの科学」p29-p43 第5章「練習計画」p207-223 第6章「クラブの運営」p224-230 小学校・中学校・高等学校・社会体育の指導者を対象とした競技の解説書で、バレーボールはチームゲームであるという点に着目し、ゲームとは何か、ゲームを構成する要素は何か、ゲームに勝つための必要条件は何かと言った観点より、最も新しい科学理論を用いながら説明した。
2 大学スポーツの新展開 日本版 NCAA 創設と関西からの挑戦	共著	2018.4	晃洋書房 A5判 総頁数 194	(編者) 大学コンソーシアム KANSAI (著者) 伊坂忠夫他 3 2名(担当部分)Chapter3 「大学スポーツのガバナンス」 Column3 「関西の学連の試み」 p82-84 関西大学バレーボール連盟の歴史、現在、将来展望を総覧し、日本版 NCAA の創設との関連性について考察した。
(翻訳本) 1 コーチングマニュアル スポーツ技術の指導	共著	1991.3	大修館書店 B5判 総頁数 162	著者) R.W.クリスチナ、D.M. コーコス (共訳者) 豊田博、渡植理保、山本章雄、遠藤俊郎、荒木田祐子、南匡泰、白井徹男、三上修二、高梨泰彦、安部孝、黒川貞夫、明石正和 (担当部分) 第2章「スキルの学習課程の理解」 p21-32 総頁数 162 運動技術の習得過程は、外部に発現されるパフォーマンスの善し悪しだけで捉えていると大きな間違いを犯すこととなる。実際、技能が習得されつつあっても良好なパフォーマンスとして現れることなく、逆にパフォーマンスの低下として技術遂行に表現されることもあるからである。コーチは科学的な「運動学習理論」や個人差に充分理解を持って、技術指導にあたることが大切であることを翻訳。

著書, 学術論文等の名称	単著, 共著の 別	発行又は発表 の年月	発行所, 発表雑 誌等又は発表学 会等の名称	概 要
(学術論文) 1 事例研究(1)スポーツ選手の 甘えと反抗の心理	共 著	1979.4	大阪体育学研究 No.17 P63-66	(共著者) 津田忠雄、山本章雄 (担当 部分) 全体にわたって討議しながら検 討作成した。 青年期におけるスポーツ選手の潜在 的危険性を「反抗」と「甘え」という 側面にとらえ、彼らの反抗を生み出す 今日のスポーツ集団の特殊性を「母性 社会化されたスポーツ集団」という鍵 概念を用い検討し、さらに彼らの反抗 を正確に把握し、そこに潜む個性化の 可能性にも焦点を合わせ事例的に検 証した。
2 実業団リーグ十年間における 得点内容の推移	共 著	1979.1	バレーボール Vol.7-10 P55-58	(共著者) 土谷秀雄、島津大宣、古沢 久雄、梶尾義昭、亀山紘美、木村章二、 桑山義昭、南匡泰、山本章雄、白井徹 男、柏森康雄 (担当部分) 全体構想お よび集計分析、執筆。 第1回から第10回までの実業団リ ーグの得点内容について分析を行っ た。その結果、ブロックによる得点比 率が回を追うごとに上昇し、逆にミス による失点が減少していた。これは、 競技力の向上と、ゲームの質の変化を 示しているものと考えられる。また、 男女間の比較では、女子に於いてサー ブによる得点率が高くなっており、男 女間のバレーボールに質の違いが存 在することが数字で証明された。
3 バレーボールのゲーム分析 サーブの落下点とサーブレ シーブの関係	共 著	1980.3	大阪市立大学保 健体躯学研究紀 要 Vol.15 P41-52	(共著者) 吉原一男、土谷秀雄、木村 章二、山本章雄、桑山義昭、亀山紘美、 綱村昭彦、山根武、南匡泰、白井徹男、 柏森康雄 (担当部分) 全体構想および 集計分析、執筆。 バレーボール競技では、サーブとサー ブレシーブの成否が勝敗を左右する 大きな鍵である。本研究では、都市対 抗優勝大会におけるすべてのサーブ プレー (合計 8934) を記録分析し、 サーブの打たれるコースの種別と成 功の関係を調べた。その結果、ストレ ートコースへのサーブが最も有効で あることが検証された。
4 大阪女子大学生の運動能力	共 著	1981.3	大阪女子大学紀	(共著者) 千東梅員、中田順造、増尾

著書, 学術論文等の名称	単著, 共著の 別	発行又は発表 の年月	発行所, 発表雑 誌等又は発表学 会等の名称	概 要
について (第四報)			要基礎理学編 No.18 P21-34	清子、 <u>山本章雄</u> (担当部分) 測定・集計・および執筆 大阪女子大学生の体力の現状を知り、今後の体育実技指導の課題を探るため、文部省体力テスト (7項目) を昭和46年入学生から昭和52年入学生までの1120名に実施し考察を行った。体力の変化は在学4年間ほとんどなく、体力が維持されていることがけんしょうされた。また、全国平均値と比較すると瞬発力、敏捷性が優れていることがわかった。
5 スポーツアイデンティティ一試論	共 著	1981.3	近畿大学教養部 研究紀要 Vol.12-3 P99-109	(共著者) 津田忠雄、 <u>山本章雄</u> (担当部分) 基本概念の検討および執筆 スポーツの本当の姿はどこにあるのか。スポーツをすることの自然な自明性とは。という命題を解決する糸口として、現代スポーツの二極化現象と青年期スポーツ選手の肉体的苦悩に焦点を当て、事例研究により考察した。スポーツは青年期固有のライフタスク、すなわち個性化 (同一性獲得) に大きな意味を持っていると考え、これをスポーツの持つ価値として「スポーツアイデンティティ」と命名し、概念化した。
6 全日本男子バレーボール選手の体力トレーニングとその成果	共 著	1982.3	大阪市立大学保健 体躯学研究紀 要 Vol.17 P77-80	(共著者) 土谷秀雄、吉原一男、南匡泰、 <u>山本章雄</u> 、白井徹男 (担当部分) 全体構想および集計分析、執筆。 外国選手と比較して体格的に劣っている日本選手にとって、ジャンプ力を強化することは競技力向上において必須条件である。本研究は、ゴム跳び、回転ボール、カードジャンプの3種類の強化トレーニングを5ヶ月間処方し、その結果を検討したもので、各トレーニングとも脚筋力、背筋力、上体起こし、サイドステップに顕著な上昇をもたらし、ジャンプ力においては平均7cm(9.9%増)の向上が認められた。
7 ビルマ代表バレーボール選手の体力について	単 著	1983.3	大阪女子大学紀 要基礎理学編 No.20 P35-41	東南アジアに於いてトップレベルにあるビルマナショナルバレーボールチームが、より一層競技力を向上させるためには、どのような体力的改善が

著書, 学術論文等の名称	単著, 共著の 別	発行又は発表 の年月	発行所, 発表雑 誌等又は発表学 会等の名称	概 要
8 日本におけるバレーボールの文献目録作成に関する研究(1)	共 著	1983.3	バレーボール協会報 No.4 P1-23	<p>必要であるかの基礎的資料を得るため、14項目の体力測定を実施し、世界の中で体力的に高い水準にある日本選手の値と比較検討した。その結果、ビルマ選手は調整能力、とジャンプ力において記録が低く、この強化が今後の課題であることが検出された。</p> <p>(共著者) 清川勝行、<u>山本章雄</u>、桑山義昭、橋爪静夫、土谷秀雄(担当部分)全体構想および集計作業・目録作成・執筆。</p> <p>日本におけるバレーボールに関する研究論文の数は、競技が盛んになるにつれ増加しつつあるが、これまでこれをまとめ分類した目録がなかったため、これを調査作成した。収集された文献は学会刊行物掲載論文427件、大学・研究所等紀要掲載論文380件合計807件であり、これらを発表年別に整理し一覧とした。</p>
9 日本におけるバレーボールの文献目録作成に関する研究(2)	共 著	1983.3	バレーボール協会報 No.5 P1-29	<p>(共著者) 清川勝行、<u>山本章雄</u>、桑山義昭、橋爪静夫、土谷秀雄(担当部分)全体構想および集計作業・目録作成・執筆。</p> <p>研究論文の調査収集に引き続き、定期刊行物に記載されたバレーボール関連記事、また、バレーボールに関する単行本について目録作成作業を行った。収集された文献は定期刊行物に記載された記事343件、単行本202冊であり、これらを発表年別に整理し一覧とした。</p>
10 バレーボールにおける技能習得過程に関する研究	共 著	1984.3	大阪女子大学紀要体育学編 No.21 P21-32	<p>(共著者) <u>山本章雄</u>、柏森康雄、浅井正仁(担当部分)全体構想および実験・集計分析、執筆。</p> <p>初心者に対するバレーボールの技術指導をより合理的に行うための方法として軽量級の使用が考えられる。本研究では、公認球と軽量球を使用する2つのグループを設定し、パス、サーブ、レシーブといった基本技術の練習を行い、その後の試合内容にどのような差が生じるかを検討したが、有意な差は検出されなかった。</p>

著書, 学術論文等の名称	単著, 共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
11 企業運動部選手の意識と行動	共著	1985.2	天理大学体育学部研究報告書 No.2 P1-13	(共著者) 岸檜夫、川之上正信、清川勝行、林正邦、藤田主計、小椋博、二杉茂、 <u>山本章雄</u> (担当部分) 全体構想の検討および調査担当。 日本のトップレベルのスポーツ選手は、ほとんどが企業に所属し活動している。この企業チームに所属する選手に実態のアンケート調査を実施し、①かなりの種目でプロ化が進んでいる。②スポーツ活動が企業での業務となっている。③選手の自立性がかかなり抑制されている。などの結果を得た。
12 バレーボールにおけるブロック技術の文献的研究	共著	1986.3	大阪市立大学保健体躯学研究紀要 Vol.22 P21-27	(共著者) 吉原一男、 <u>山本章雄</u> 、土谷秀雄、南匡泰 (担当部分) 全体構想および資料収集、考察、執筆。 日本および海外文献よりブロックに関する記事を31件抽出し、ブロック技術遂行の時系列に従って記述内容を整理し検討を行った。その結果、ブロックの理想的なフォームは不変なものとしてある程度確立せられており、今後の課題としては、予測能力の強化要素、高さを保障するジャンプ技術、組織化の方法などの検討、開発が重要であることが示唆された。
13 バレーボールにおける守備技術・戦術の歴史的発展と推移	単著	1986.2	バレーボール協会報 No.12 P1-4	創案以来90年以上が経過したバレーボールの、守備の歴史を文献を手掛かりに調査した。生成期は1913年から1930年頃と考えられ、個人技術と基本理論が確立していた。充実期は1930年から1950年までで、ポジション別分業が考案されている。6人制への移行期は1950年から1960年頃で多少の混乱を招いたが、逆に9人制の理論が確立していった。発展期は1960年より1985年であり、攻撃的になったブロックの登場によりフォーメーションが大きく変化している。これらの変遷は、ルールの変更、体力の向上、用具の進歩などの影響も受けながら推移していることも検証された。
14 大阪女子大学生の体育・スポーツに関する研究(1) 体育の授業とスポーツに対する態度およびスポーツ	共著	1987.3	大阪女子大学紀要体育学編 No.26 P39-56	(共著者) 中田順造、 <u>山本章雄</u> 、尾懸貢、熊安貴美江 (担当部分) 調査票をはじめ、全過程に於いて討論しながら検討、執筆担当。

著書, 学術論文等の名称	単著, 共著の 別	発行又は発表 の年月	発行所, 発表雑 誌等又は発表学 会等の名称	概 要
<p>に対する志向性について</p> <p>15 女子大学生の体育・スポーツに対する態度及びスポーツにおける志向性に関する研究—運動部所属年数との関係—</p>	共 著	1988.4	大阪体育学研究 No.26 P9-15	<p>4年間体育実技実施という、大阪女子大学のエークな取り組みの学習成果について、心理面での効果を評価するため、質問紙調査を実施した。体育・スポーツに対する態度については、全学年を通して好意的、とりわけ1・2・3年次に比べて4年生の好意度が高かった。スポーツに対する志向は、競技志向よりはレクリエーション志向が強く、さらに行動レベルにみられるこの傾向は、学年が高くなるにつれ強くなることなどが確認された。</p> <p>(共著者) <u>山本章雄</u>、中田順造、尾縣貢、熊安貴美江</p> <p>(担当部分) 調査票の検討、実施、分析など全過程を討論しながら検討</p> <p>大阪女子大学学生の体育・スポーツに対する態度と、スポーツに対する志向性を、運動部所属年数の違いによって比較分析した。体育に対する態度には、所属年数による違いはみられなかったが、スポーツに対する態度は運動部所属年数が4年を越えると好意的態度が強まる傾向がみられた。また所属年数4年を境に、スポーツへの志向がレクリエーション志向から競技志向へと転換する傾向がみられた。</p>
<p>16 バレーボールの技術に関する研究 ブロック時の対応技術について</p>	単 著	1988.2	バレーボール協 会報 No.19 P2-6	<p>ブロックにおける相手との対応技術を解明するため、1986年開催のジャパンカップ国際大会に参加した世界トップレベルチームのブロックをビデオに収録し分析を行った。その結果、個人の技術を背景とした「力のブロック」とチームとして組織的に行う「システムブロック」が見出され、今後ますます重要となるブロックに於いて、日本がどのような対応技術を用いるかの基礎的資料を得ることができた。</p>
<p>17 全日本ジュニア男子選手の体力の現状について</p>	共 著	1988.3	バレーボール協 会報 No.19	<p>(共著者) 坂井充、南匡泰、<u>山本章雄</u>、清川勝行、白井徹男、福田隆、桑山義昭、田中信雄 (担当部分) 全体構想および測定資料収集、考察。</p>

著書, 学術論文等の名称	単著, 共著の 別	発行又は発表 の年月	発行所, 発表雑 誌等又は発表学 会等の名称	概 要
18 成人女性におけるオーバー ハンドスロー動作の検討 投距離に影響を与える体 力要因を考慮して	共 著	1989.6	P7-10 体育学研究 Vol.34-No.1 P63-72	<p>次代の全日本を担うジュニア選手の 体力の現状を把握し、トレーニング目 標を明確にするため22項目に上る 測定を実施し検討を行った。その結 果、ジュニアと全日本を比較した場合 筋力、スピード、調整力などほとんど すべての項目で全日本の記録が大き く増さっており、ジュニア選手の抜本 的な体力強化の必要性が示唆された。</p> <p>(共著者) 尾縣貢、<u>山本章雄</u>、中田順造、 熊安貴美江</p> <p>(担当部分) 遠投距離・体力測定から分析 など、全過程において議論しながら検討 オーバーハンドスローによるソフトボ ール投げの遠投距離の測定と筋力測定から、 成人女性(女子大学生)の合理的な投動作 について検討した結果、以下のような結論 が見いだされた。女性の投動作における合 理性の基準となるポイントは ①ステッ プによる体幹のひねりと投げ手の後方へ の引き ②主動作中の肩の回転 ③上 肢にみられるムチ運動④リリース直前の スナップ動作 と考えられた。</p>
19 全日本中学選抜バレーボ ール選手の体力について	共 著	1990.3	JVA Volleyball No.33 P37-48	<p>(共著者) 八坂剛史、南匡泰、明石正 和、<u>山本章雄</u>、田中信雄、福田隆、川 之上豊、白井徹男(担当部分)全体構 想および測定資料収集、考察。</p> <p>1989 年全日本中学選抜合宿に参加し た、」男子17名女子21名の選手に対 し、形態4項目および体力12項目の 測定を実施し、1985年中学選抜、1988 年高校選抜、1989年高校選抜の測定 結果と比較を行い、体力の問題点と今 後の強化の指針を得る手掛かりとし た。その結果、形態的には高校生と比 較して差がなく問題がないが、体力的 には、ジャンプ力、瞬発力、スピード に問題が検出され、今後の対策が必要 であることが示唆された。</p>
20 大阪女子大学生の体育・ス ポーツに関する研究(1) 体育の授業とスポーツに 対する態度およびスポ ーツに対する志向性の在学	共 著	1991.3	大阪女子大学紀 要体育学編 No.28 P55-69	<p>(共著者) 中田順造、<u>山本章雄</u>、吉武信二、 熊安貴美江、尾縣貢</p> <p>(分担部分) 質問紙作成と調査実施、分析 など全過程を討論しながら検討した。 大阪女子大学生の体育とスポーツに対す</p>

著書, 学術論文等の名称	単著, 共著の 別	発行又は発表 の年月	発行所, 発表雑 誌等又は発表学 会等の名称	概 要
<p>期間中の推移について</p> <p>21 大阪女子大学生の運動能力 について (第五報)</p>	<p>共 著</p>	<p>1993.3</p>	<p>大阪女子大学紀 要体育学編 No.30 P51-69</p>	<p>る態度およびスポーツに対する志向性の、 在学期間中の推移を知るため、4年間の追 跡調査を行った。体育の授業およびスポー ツに対する好意度は、学年があがるととも に高くなり、1,2年次に比べ3,4年次の方 がより高い好意度を示した。4年間を通じ てスポーツへの競技志向は低く、レクリエ ーション志向は高年次になるに従い、高ま る傾向を示した。これらの傾向から、学生 の体育・スポーツに取り組む心理機能に対 する、本学の4年間体育実技履修の肯定的 影響が確認された。</p> <p>(共著者) 吉武信二、中田順造、<u>山本章雄</u>、 熊安貴美江、尾縣貢 (担当部分) 体力測定と結果の分析、考察 など、全過程を討論しながら検討した。 大阪女子大学生の健康を、体力面から客観 的に評価し、4年間体育実技実施の成果を はかるため、在学4年間の体力測定デー タの推移を調べた。在学4年間の推移につ いては、握力・立位体前屈・垂直跳・反復横 跳などの測定データはほぼ変化がなく、背 筋力・伏臥上体そらし・踏み台昇降の各 項目においては18歳よりも21歳の方が 高い値を示した。全国平均値との比較に おいても、入学年度には差が見られな かったが、21歳時には握力を除くほか の6種目すべてにおいてすぐれるとい う結果がみられ、本学の4年間体育 実技実施の効果として評価されるべき との知見を得た。</p>
<p>22 一流選手の心理状況の変化 に関する研究 女子バレーボール選手に ついて</p>	<p>共 著</p>	<p>1994.3</p>	<p>大阪女子大学紀 要体育学編 No.31 P59-73</p>	<p>(共著者) <u>山本章雄</u>、<u>遠藤俊郎</u> (担当部分) 企画、調査、集計、考察、<u>執筆</u>を担当した。</p> <p>平成5年度日本代表に選拔され、アジア選 手権威参加した女子選手12名を対象と し、心理状況のうち感情や気分の状況 を把握できる「POMSテスト」を、合宿 中、試合期間、試合終了後の3回測定 し、その変化や特徴を分析すること により、選手各個人に対する今後の メンタルサポート方法を検討する 資料とした。選手はベテランから若 手まで多様な立場・経験の者がお り、3回の測定時環境に対する反応 も様々であり、選手の特徴に合わせた こまめな丁寧な対応が必要である 小田が示された。</p>

著書, 学術論文等の名称	単著, 共著の 別	発行又は発表 の年月	発行所, 発表雑 誌等又は発表学 会等の名称	概 要
23 スポーツ指導者におけるス ポーツ観および指導観に 関する研究 大阪府におけるスポーツ 指導者(有資格者)の経験 競技種目に着目して	共 著	1995.3	大阪女子大学紀 要体育学編 No.32 P35-74	(共著者) 吉武信二、中田順造、 <u>山本章雄</u> 、 熊安貴美江 (担当部分) 質問紙作成と調査実施、分析 など、全過程を討論しながら検討した。 有資格スポーツ指導者のスポーツ観 と指導観を、経験した競技種目に着目 して比較検討した。スポーツ観につい て種目ごとの差が大きかった項目は 「勝利」「向上」「自信」「楽しさ」「地 域活性」などであり、指導観につい ては、「勝利」「ストレス解消」「健康・ 体力」「ルール・マナー」などの項目 に差異が見られた。指導者自身が経験 した競技種目によって、その後のスポ ーツ観、指導観に相違がみられること が明らかになった。
24 スポーツ指導者の活動実態 と意識に関する調査研究 大阪府内の有資格「スポー ツ」指導者の男女差に着目 して	共 著	1996.3	大阪女子大学紀 要体育学編 No.33 P45-65	(共著者) 熊安貴美江、中田順造、 <u>山本章 雄</u> 、吉武信二 (分担部分) 質問紙作成と調査実施、分析 など、全過程を討論しながら検討した。 大阪府内の有資格スポーツ指導者の活動 実態とスポーツに対する意識を、性差に着 目して比較検討した。男性指導者は、さま ざまな競技レベルの指導をし、監督という 役割を担う者が多かったのに対し、女性は 初心者指導につく者が多く、上級レベルの 指導者が少ないという傾向が見られた。ま た、所持している資格を実際に活用してい ない割合は男性の4割に対して女性が6割 と高く、スポーツ指導者における実態の男 女差が明らかになった。
25 大阪女子大学生の体育・ス ポーツに関する研究(3) YG性格検査との関係	共 著	1998.3	大阪女子大学紀 要体育学編 No.35 P57-63	(共著者) 中田順造、 <u>山本章雄</u> 、熊安貴美 江、吉武信二 (分担部分) 質問紙作成、分析など全過程 を討論しながら検討した。 大阪女子大学生の体育・スポーツに対する 態度やスポーツに対する志向性を、YG性 格検査との関連から比較分析した。 体育やスポーツに対する態度は、「活 動的・積極的・外向型性格」の者が好 意的、「非活動的・消極的・内向的性 格」の者が非好意的であるなど、性格 によって異なることが示された。一 方、本学学生はおおむね競技志向より はレクリエーション志向を示してお

著書, 学術論文等の名称	単著, 共著の 別	発行又は発表 の年月	発行所, 発表雑 誌等又は発表学 会等の名称	概 要
26 女子大学生の体育・スポーツに関する研究(1) 専攻分野から見た体育の授業とスポーツに対する態度および志向性	共 著	1999.3	大阪女子大学紀 要体育学編 No.36 P39-51	り、性格が「スポーツに対する志向性」を規定する要因とは考えられないという結論が見出された (共著者) 吉武信二、中田順造、 <u>山本章雄</u> 、熊安貴美江 (分担部分) 質問紙作成と調査実施、分析など全過程を討論しながら検討した。女子大学生の体育・スポーツに対する態度や志向性の違いを、理系、文系、体育系の3専攻分野について比較検討した。体育・スポーツへの態度については体育系の肯定度をもっとも高いが、その身体的効果については全グループが好意的であった。文系・理系学生と体育系学生とでは、前者がより高いレクリエーション志向、後者がより高い競技志向を、意識の上で示した。スポーツのあり方がより多様化しつつある現代において、行為者の志向やニーズに対応した体育・スポーツ指導を考えるうえで、ひとつの有用な知見が得られた。
27 ボランティアの異組織間・協力関係形成に関するアクションリサーチ 「被災地・NGO協働センター」と「大阪府バレーボール協会」	共 著	2000.3	人間関係論集 No.17 P59-72	(共著者) <u>山本章雄</u> 、藤田正 (分担部分) 全体構想および集団間の仲介。 異なる性格を持つ組織間の協力関係はどのような形成過程を経て達成されるのか、特に非常事態である災害被災地に於いてはどのような関係においてこれが行われるのか、と言った課題を実際の関係づくりを検証することで明らかにしようとした。また、この過程に於いて、どのような要因が関係形成にポジティブに関与し、またネガティブに関与するのかと言った内部構造についてもNGO組織とスポーツ団体の実際の関わり合いを通して考察した。
28 全国大会へ出場する高校女子バレーボールチームの体力分析	共 著	2001	平成 12 年度科学研究論集 No.1 P8-16	(共著者) 八坂剛史、南匡泰、原巖、 <u>山本章雄</u> 、白井徹男、津田佳弘、橋爪裕、濱田幸二、井上広国、速水達也 (担当部分) 全体構想および測定資料収集、考察。 全国大会にほぼ毎年出場しトップに近い成績を収めている高校女子チームの、1994年から2000年までの6年間にわたる体力測定の結果を縦断的

著書, 学術論文等の名称	単著, 共著の 別	発行又は発表 の年月	発行所, 発表雑 誌等又は発表学 会等の名称	概 要
29 スパイク助走における踏切 時間の分析 2001 年世界ジュニア男子 選手権	共 著	2002.2	平成 12 年度科 学研究論集 No.2 P3-7	<p>に調査検討することで、競技成績と体力要素にどのような関係があるのかを考察した。その結果、ジャンプ力、筋力、敏捷性と大会成績に相関的な関係があり、スパイクジャンプにおいては 60 cm、背筋力においては 102 kg、反復横跳びにおいては 49 回を超えることが、全国レベルで活躍する基準であることが示唆された。</p> <p>(共著者) 八坂剛史、亀山絃美、高梨泰彦、津田佳弘、柏森康雄、中島克典、原巖、<u>山本章雄</u>、白数仁孝、松田明彦、西川奈緒、長島早弥香、金子美幸、白井徹男、南匡泰</p> <p>(担当部分) 全体構想および測定資料収集、考察。</p> <p>2001 年ポーランドに於いて開催された世界ジュニア男子選手権で撮影したビデオをもとに、スパイクジャンプにおける助走の最後に 1 歩に着目し、着地から離地までの時間を計測比較した。その結果、最も短い踏切は 0.27 秒、最も長い踏切は 0.48 秒であり、踏切時間の長短は、打球するスパイクの種類や選手のポジションによる影響より、むしろ個人のジャンプ特性を反映していることが明らかにされた。今後は、筋肉の伸張—短縮サイクル運動理論を積極的にトレーニングに導入し、ジャンプ踏切時間の短縮をはかることが重要であることが示唆された。</p>
30 全日本高校選抜選手の心理 コンディショニングの変 化に関する一考察	共 著	2002.2	平成 12 年度科 学研究論集 No.2 P11-18	<p>(共著者) 遠藤俊郎、渡辺英児、加戸隆司、<u>山本章雄</u>、井上広国、宮内一三、橋爪裕、津田佳弘、濱田幸二</p> <p>(担当部分) 全体構想および測定資料収集、考察。</p> <p>平成 12 年度全国高校選抜合宿に参加した男子 46 名女子 38 名の選手に対し、「モーズレイ性格検査」「スポーツ競技不安テスト」「体協競技動機テスト」および「練習日誌」の自己記録を行うことにより、総合的に選手の心理状態および特徴の把握を試みた。その結果、女子に於いて「不安」「悲しみ」</p>

著書, 学術論文等の名称	単著, 共著の 別	発行又は発表 の年月	発行所, 発表雑 誌等又は発表学 会等の名称	概 要
31 ビーチバレー選手の体力に関する研究	共 著	2003.2	平成 14 年度科学研究論集 No.3 P6-10	<p>「怒り」「混乱」など競技実施においてネガティブな項目で傾向性が高く、また、男女ともに中程度の競技不安を示しており、将来性のある選手たちへのこうした点での心理サポートが重要であることが示された。</p> <p>(共著者) 井上国広、亀山紘美、金子美由紀、高橋勝美、津田佳弘、<u>山本章雄</u>、<u>山元聡</u>、橋爪裕、白井徹男、八坂剛史、南匡泰</p> <p>(担当部分) 全体構想および測定資料収集、考察、執筆。</p> <p>ビーチバレーが盛んになり、今後の競技力向上にはどのような体力が必要であり、その強化にはどのような手法が必要であるかの基礎資料を得るため、国内トップレベルの男女選手に対して一般的な体力測定およびビーチバレーで特に要求が予想される特殊体力について測定を実施し、評価、分析を行った。</p>
32 関西における大学女子バレーボールの歴史-連盟の発足から男女連盟の統合まで	単 著	2005.3	人間関係論集 No.22 P153-158	<p>関西の女子大学バレーボールの歴史は昭和 28 年に開催された「近畿バレーボール大学女子選手権大会」が契機となっており、連盟組織は昭和 29 年の結成されている。以後 9 人制から 6 人制への移行、リーグ戦の開始、全国大会の開催などを経過しながら発展を続け、昭和 40 年にはユニバシアードなどの国際大会に選手を輩出するまで実力を向上させている。また、加盟チーム数も増加を辿り連盟結成時には 10 大学程度であった数が、平成 5 年には 85 チームへと拡大をしている。また、平成元年にはビーチバレーの全国大会「びあカップ」も開始され競技の種別も拡大をするに至っており、大きな発展があったといえる。</p>
33 生理心理学的指標から見た顔部への推拿の効果に関する研究	共 著	2010.4	東方医学 Vol26 No4 P1-10	<p>(共著者) 坪内伸司、松浦義昌、田中良晴、李強、<u>山本章雄</u>、<u>清水教永</u></p> <p>(担当部分) 全体構想および結果の考察</p> <p>顔部への推拿療法が生理心理的にどのような影響を与えるかを検証するため、中医師により選穴に 20 分間の</p>

著書, 学術論文等の名称	単著, 共著の 別	発行又は発表 の年月	発行所, 発表雑 誌等又は発表学 会等の名称	概 要
34 A Basic Study on Human Biophoton	共 著	2015.8	Journal of Education and Health Science Vol.61 No.1 P103-104	<p>施術を行い結果の考察を行った。その結果、推拿刺激によって体内の免疫物質が増加し、口腔局所免疫能を向上させる効果が示唆された。また、被験者の内省報告によると心的リラクゼーションの効果も見られ、推拿療法における効果が認められた。</p> <p>(共著者) S.Tsubouti,<u>A.Yamamoto</u>, N.Shimizu 生物は生体フォトンといわれる自発性粒子の放出である極めて微弱な発光をしており、生体の機能エネルギー状態を間接的に示している。本研究ではロシア・サンクトペテルブルグ工業大学のコロトコフ博士が開発したGVD装置を使用することにより、皮膚で生じる電磁界の微弱な発光現象を検出することにより、生体エネルギー代謝の状況と精神作業の関係を検討する基礎的な実験を試みた。</p>
35 Fluctuations in Human Bioenergy during the Day as Observed from the Evoked Photon	共 著	2018.10	Health P1309-1320 Scientific Research Publishing	<p>(共著者) S.Tsubouchi,H.Uchida,<u>A.Yamamoto</u> ,N.shimizu The evoked photon, a weak light emitted from organisms, is a new parameter for measuring life activities, which was recorded using gas discharge visualization (GDV) equipment, and the area and intensity of the energy field index from the GDV image glow were correlated to biorhythmic fluctuations, as corroborated by biochemical measurements of secretory-immunoglobulin A levels. The evoked photon reflects the bioenergy of the entire body and can used as a general indicator of physical health.</p>
(資料・報告・その他) 1 全日本男子チームの体力の現状について	共 著	1982.2	日本体育協会スポーツ医科学研究報告 No.II-5 P55-59	<p>(共著者) 土谷秀雄、南匡泰、白井徹男、<u>山本章雄</u>、福田隆、亀山紘美、平岡泰彦 (担当部分) 全体構想および集計分析、執筆。 1981年に開催されたワールドカップ</p>

著書, 学術論文等の名称	単著, 共著の 別	発行又は発表 の年月	発行所, 発表雑 誌等又は発表学 会等の名称	概 要
2 全日本男子選手のジャンプ力について	共 著	1983.2	日本体育協会スポーツ医科学研究報告 No. II-6 P323-328	<p>に出場した全日本男子チームの体力を、過去4年間に全日本に選出された選手の体力と比較することにより、問題点を明らかにし、体力トレーニングの指針を求めよとした。測定は、形態、筋力、スピード、ジャンプ力など合計14項目について行われた。その結果、体格は停滞気味もしくは小型化がうかがわれ、ジャンプ力の低さも目立った。また、スピード、敏捷性、柔軟性は優れているが、筋力が劣っていることが見出された。</p> <p>(共著者) 土谷秀雄、南匡泰、白井徹男、桑山義昭、清川勝行、亀山紘美、山根武、綱村明彦、田中信雄、柏森康雄、<u>山本章雄</u>、福田隆、梶尾義昭</p> <p>(担当部分) 全体構想および集計分析、執筆。</p> <p>1952年より1982年までの24年間に全日本男子に選抜された選手の垂直跳びの記録を分析することにより、ジャンプ力の推移、ジャンプ力向上の可能性と年齢の関係を見ようとした。これによると、全日本男子のジャンプ力は東京オリンピックを頂点として下降傾向にあるが、適切なそして集中的なジャンプトレーニングが実施されるオリンピック開催年には急激に向上している。また、トレーニングによる平均的トレーナビリティは80cmと予測され、素質を持つ選手では90cmを望むことができると判断される。年齢の関係では、20才後半が最高値を示しており、トレーニング次第では30才前半まで維持することが可能であると考えられる。</p>
3 全日本男女選手の体力に関する研究	共 著	1985.2	日本体育協会スポーツ医科学研究報告 No. II-8 P49-54	<p>(共著者) 豊田博、島津大宣、明石正明、南匡泰、田中信雄、志村栄一、白井徹男、泉川喬一、田中博明、亀山紘美、渡辺晴行、柏森康雄、古沢久雄、梶尾義昭、斉藤勝、福田隆、綱村明彦、<u>山本章雄</u>、清川勝行、山本外憲、三上修二、矢島忠明、遠藤俊郎</p> <p>(担当部分) 全体構想および測定集計分析。</p> <p>ロサンゼルスオリンピックに参加し</p>

著書, 学術論文等の名称	単著, 共著の 別	発行又は発表 の年月	発行所, 発表雑 誌等又は発表学 会等の名称	概 要
4 ジャンプに関する研究 連続ブロックジャンプ	共 著	1985.2	日本体育協会ス ポーツ医科学研 究報告 No. II-8 P54-57	<p>た男女全日本チーム選手の体力について、18項目にわたる測定分析を実施した。その結果、男子のジャンプ到達点が過去六年間で最低を記録し、大会7位の原因の一つが明らかとなった。女子は、身長、ジャンプ到達点とも過去最高を記録したが、世界のトップレベルからは依然として10～20cm低い。高さが競技力を左右する重要因子となった近代バレーでは、男子350cm、女子320cmの到達点が必要と考えられる。</p> <p>(共著者) 南匡泰、福田隆、桑山義昭、渡辺晴行、橋爪静夫、清川勝行、亀山紘美、山根武、白井徹男、田中信雄、志村栄一、西村栄蔵、<u>山本章雄</u>、土谷秀雄</p> <p>(担当部分) 全体構想および測定集計分析。</p> <p>バレーボールの攻撃パターンは複雑化し、これに対するブロックも二回連続でのジャンプが必要なテクニックとなってきた。本研究では、大学生6名に対し、最初のジャンプ高条件(全力の80%、60%)と2回目のジャンプの膝屈強角度条件(140～160、110～130、80～100)を設定し実験的に連続ジャンプを行わせた。その結果、最初のジャンプ高が高いほど2回目のジャンプ動作は遅くなる、2回目のジャンプを速く行うには、膝屈曲角度が浅い方が良く、ジャンプ高を含めた至適角度は110から130度である結論を得た。</p>
5 バレーボールにおけるジャンプに関する研究 助走速度・踏切時間と跳躍高との関連について	共 著	1986.2	日本体育協会ス ポーツ医科学研 究報告 No. II-9 P163-166	<p>(共著者) 清川勝行、木村章二、<u>山本章雄</u>、白井徹男</p> <p>(担当部分) 全体構想および測定集計分析。</p> <p>助走を巧みに生かしたジャンプ高を得るには、両足同時着地ジャンプと両足順次着地ジャンプのどちらが有効であるかを調査するため、腕を固定したドロップジャンプをそれぞれの方法で行うことにより検証した。その結果、60cmの台より落下速度3.5/sで両足同時着地ジャンプを行った時最も</p>

著書, 学術論文等の名称	単著, 共著の 別	発行又は発表 の年月	発行所, 発表雑 誌等又は発表学 会等の名称	概 要
6 バレーボールにおけるジャンプに関する研究 連続ブロックジャンプについて(3)	共 著	1987.2	日本体育協会スポーツ医科学研究報告 No. II-10 P190-193	<p>効率よく弾性エネルギーが利用されていることが判明した。今後は、助走のスピードアップと両足同時着地ジャンプをコーディネートした技術開発が必要と考えられる。</p> <p>(共著者) 福田隆、南匡泰、桑山義昭、亀山紘美、清川勝行、西村栄蔵、<u>山本章雄</u>、木村章二、白井徹男 (担当部分) 全体構想および測定集計分析。</p> <p>バレーボールの攻撃パターンは複雑化し、これに対するブロックも二回連続でのジャンプが必要なテクニックとなってきた。本研究では、二回連続ジャンプを含んだブロック動作での、初回ジャンプの着地方法に着目し、両足着地と片足着地、および膝屈曲角度の条件を設定し実験的に検討を行った。その結果、片足着地が両足着地より有効に速く二回目のジャンプへ移行でき、膝屈曲角度は105～120度が最速であることが検証された。</p>
7 バレーボール選手の体力に関する研究 (1)1987年ユニバーシアード日本男子代表選手の体力について	共 著	1988.2	日本体育協会スポーツ医科学研究報告 No. II-11 P105-112	<p>(共著者) 南匡泰、坂井充、柏森康雄、土谷秀雄、白井徹男、泉川喬一、<u>山本章雄</u>、三上修二、津田佳弘、亀山紘美、山本外憲、前田如矢 (担当部分) 全体構想および測定集計分析。</p> <p>1987年ユニバーシアード日本男子代表選手12名について、体格、筋力、運動能力、など18項目の体力測定を行った。その結果、形態面では身長において優れた値を示し、パワーにおいても同様な傾向があった。一方、筋力と柔軟性において全日本選手と比較し数値が劣っていた。また、12名の個人記録を見ると、優劣の差が著しく、個人の能力差が大きいことも検出された。</p>
8 バレーボール選手の体力に関する研究 (2)1988年全日本ジュニア女子選手の体力について	共 著	1989.2	日本体育協会スポーツ医科学研究報告 No. II-12 P80-84	<p>(共著者) <u>山本章雄</u>、南匡泰、白井徹男、津田佳弘、桑山義昭、柏森康雄、横川正洋、木村章二、前田如矢 (担当部分) 全体構想および測定集計分析、執筆。</p> <p>1988年アジアジュニア選手権に参加</p>

著書, 学術論文等の名称	単著, 共著の 別	発行又は発表 の年月	発行所, 発表雑 誌等又は発表学 会等の名称	概 要
9 バレーボール選手の体力に関する研究 1989年全日本女子選手の体力の現状について	共 著	1990.2	日本体育協会スポーツ医科学研究報告 No. II-13 P255-261	<p>した全日本ジュニア女子バレーボール選手12名について、4ヶ月毎に3回、筋力、運動能力、など13項目の体力測定を行い分析を行った。その結果、①筋力全般に一定した増加傾向がうかがえる。②ジャンプ系パワーは第2回測定値が最も悪い。強化練習の疲れによる影響が考えられる。③柔軟性においても、一貫して記録の上昇が見られた。などの結果得た。</p> <p>(共著者) 原徹、南匡泰、亀山紘美、明石正明、白井徹男、泉川喬一、津田佳弘、木村章二、田中博明、<u>山本章雄</u>前田如矢、梶尾義昭 (担当部分) 全体構想および測定集計分析。</p> <p>1989年の全日本女子バレーボール選手16名について、体格、筋力、運動能力など15項目の体力測定を行い分析をした。その結果、身長に於いて世界トップレベルより5cm平均が劣り、5年前の全日本と比較して、背筋力、垂直跳び、9m3往復走、サイドステップの各測定項目で、有意に数値が上回っていることが見出された。</p>
10 全日本男子チームの体力およびその測定方法に関する研究	共 著	1991.2	日本体育協会スポーツ医科学研究報告 No. II-14 P59-65	<p>(共著者) 高梨泰彦、南匡泰、豊田博、白井徹男、津田佳弘、柏森康雄、田中信雄、<u>山本章雄</u>、坂井充 (担当部分) 全体構想および測定集計分析。</p> <p>1990年全日本男子バレーボールチームの体力測定結果をもとに、選手の体力の推移を概観しながら、あわせて今後の体力測定のあるべき姿をも模索しながら検討を行った。その結果、体力面に関しては大型化を目指した選手選考を行ったため身長が大きくなっているが、筋力が低下しこれに伴ったジャンプ力の減少が認められた。測定方法に関しては、体力測定の目的と時間および施設用具の制約をいかに適合させるかが問題であり、いくつかのモデルを示すこととした。</p>
11 競技種目別メンタルマネージメントに関する研究	共 著	1991.2	日本オリンピック委員会スポー	<p>(共著者) 山本勝昭、遠藤俊郎、<u>山本章雄</u>、亀山紘美</p>

著書, 学術論文等の名称	単著, 共著の 別	発行又は発表 の年月	発行所, 発表雑 誌等又は発表学 会等の名称	概 要
チームスポーツのメンタルマネジメントに関する研究			ツ医科学研究報告 No.III-2 P61-78	(担当部分) 全体構想および測定集計分析。 ジュニア期におけるメンタルトレーニングの必要性は、心理的に強くなるという目的だけでなく、自らの心理状態をコントロールする「心理技術」をこの時期に獲得しておくという観点からも非常に重要である。本研究では、この基礎資料を得るため、「POMSテスト」を縦断的に4回実施し、この時期の心理的特徴を検討した。その結果、ジュニア期の選手は試合期の心理コントロールが不安定であり、せっかく技術的に好調であってもネガティブなメンタル要因により競技成績が残せない状況が見出された。
12 ライバル外国チームのスカウティングに関する研究	共 著	1992.2	日本体育協会スポーツ医科学研究報告 No. II-15 P199-203	(共著者) 福田隆、泉川喬一、亀山紘美、坂井充、 <u>山本章雄</u> 、石井辰郎、渡辺晴行 (担当部分) 全体構想および測定集計分析。 バレーボールゲームにおける攻撃は、世界各国の伝統やチームを構成するメンバーによって特徴を持つが、攻撃に関する基本概念は近年少しずつ変化してきている。特に、バックアタックの出現により攻撃は「縦(奥行き)」の要素を加えることとなり、「高さ」「幅」と共に3次元次代を迎えている。本研究は、バルセロナオリンピックに向け開催されたワールドカップ'91に参加した6チームを対象に攻撃を分析したものである。その結果、これまでバックアタックは前衛3選手の攻撃を補完するものとして使用されていたが、今大会では予備手段としての位置づけでなく、ダイナミックな主要攻撃手段として利用されていた。今後もますますその傾向は増していくものと思われる。
13 社会人学生に関する実態調査と今後の施策に関する研究	共 著	1992.2	平成2・3年度科学研究費補助金研究成果報告書	(共著者) 笠原克博、青木隆喜、尾崎ムゲン、小股憲明、熊安貴美江、谷村覚、中島昌彌、中田順造、藤田正、柳父立一、 <u>山本章雄</u> 、和田安弘 (担当部分) 全体構想および調査実施、執筆。

著書, 学術論文等の名称	単著, 共著の 別	発行又は発表 の年月	発行所, 発表雑 誌等又は発表学 会等の名称	概 要
14 オリンピック前後の心理的 チーム変容に関する研究 全日本男子バレーボール チーム	共 著	1993.2	日本オリンピッ ク委員会スポー ツ医科学研究報 告 No.III-3 P22-27	生涯学習社会の進展にともない整備され つつある社会人入学制度に焦点をあて、そ の今後の課題を考えるため、社会人入学生 の実態を調査した。入学目的としては「学 歴」「職業上の知識・技能」の取得をめざ した者の割合が高く、大学授業に対しては 積極的に参加し、その内容におおむね満足 している傾向がみられた。また、入学者数 確保のためではなく、学ぶ意欲のあるもの に広く門戸を開放する姿勢が、大学側の課 題として指摘された。 (共著者) 山本勝昭、遠藤俊郎、岡村 豊太郎、山本章雄、亀山紘美、渡植理 保、徳島了、磯貝浩久、大浦隆陽、瀧 豊樹 (担当部分) 全体構想および調査集計 分析。 バルセロナオリンピックに参戦した 全日本男子バレーボール選手 12 名に 対し、強化合宿などの経験を通して意 識の変化がどのようにあったか、リー ダーシップ行動に対する認知、自己認 知、競技力向上への心理的変容はどの ような状態であったかを、客観データ を考察することで検証した。その結 果、「SPTTテスト」において、チ ーム有能感、コーチ信頼因子に向上傾 向があり、選手の自己認知は技術の上 達と他者認知との間で相関が認めら れた。リーダーシップ行動に対しては 82%がポジティブに認識していた。
15 オリンピック出場選手およ びコーチの心理的問題等 の調査 選手、監督およびコーチの 面接調査	共 著	1993.2	日本オリンピッ ク委員会スポー ツ医科学研究報 告 No.III-3 P60-63	(共著者) 遠藤俊郎、山本勝昭、山本 章雄、亀山紘美 (担当部分) 全体構想および面接調査 の実施、分析。 バルセロナオリンピックに向けて、選 手やコーチがどのように心理的コン ディショニングを行ったかの実態を 把握し、今後に向けての手掛かりを得 るため、質問紙調査と面接調査をバ レーボール、野球、水泳、レスリング、 の4種目の選手、コーチに行った。そ の結果、選手の心理的コンディショ ニングは過去の経験にもとづいたもの、 コーチとの関わり合いにおいて行わ れるものが大半を占めており、「伝統

著書, 学術論文等の名称	単著, 共著の 別	発行又は発表 の年月	発行所, 発表雑 誌等又は発表学 会等の名称	概 要
16 競技種目別メンタルマネージメントに関する研究 バレーボールナショナル チーム男子への心理支援 について	共 著	1993.2	日本オリンピック 委員会スポー ツ医科学研究報 告 No.III-3 P87-90	<p>的手法」によるものであった。近年普及しつつある、科学的メンタルトレーニング手法によるコンディショニングの認識はまだ希薄であり、今後の指導が急務であることが明らかとなった。</p> <p>(共著者) 遠藤俊郎、山本勝昭、<u>山本章雄</u>、<u>亀山紘美</u> (担当部分) 全体構想および心理サポート実務と結果分析。 バルセロナオリンピックに臨む全日本男子バレーボール選手に対して、メンタルトレーニングの目的および手法の解説、「SPTTテスト」「POMSテスト」の実施と結果のフィードバックを行い、これら心理支援の効果を分析した。心理テクニックについては積極的に実施者するものも表れたが、依然としてチーム全体での積極的な取り組みには至っていない。また、チームの指導者もメンタルトレーニングへの理解が不足しており、支援側と指導者の相互理解が今後必要であることが示された。</p>
17 国際女子バレーボール試合 の各フェイスによる試合分 析	共 著	1993.2	日本オリンピック 委員会スポー ツ医科学研究報 告 No.II-16 P123-131	<p>(共著者) 島津大宣、渡部晴行、泉川喬一、福田隆、坂井充、白井徹男、津田佳弘、<u>山本章雄</u>、篠村朋樹、石井辰郎、遠藤俊郎、永田俊和、梶尾義昭、<u>亀山紘美</u> (担当部分) 全体企画および試合調査・集計分析。 ネットを挟んだ対抗方競技であるバレーボールでは、相手チームの攻撃・守備パターンを知ること、また、自チームの攻撃・守備パターンをこれに適合させ戦略を立てることが、勝敗のポイントとなる。本研究では、新しい概念である「フェイス」(各ローテーションごとのラインアップ)を用い、1992年に開催されたトップ4大会の日本対キューバの試合を分析し、「フェイス」方式の分析の有効性を検証しようとするものである。この結果、「フェイス」方式では、各ローテーションごとの両チームの相性が明確になり、どのローテーションに力点を置き、ど</p>

著書, 学術論文等の名称	単著, 共著の 別	発行又は発表 の年月	発行所, 発表雑 誌等又は発表学 会等の名称	概 要
18 ジュニア世界選手権前後の 心理的チーム変容に関する研究 全日本ジュニア男女バレー ボールチーム	共 著	1994.2	日本オリンピック 委員会スポーツ 医科学研究報告 No.III-1 P41-48	<p>のローテーションで注意を必要とするかが把握できることが示された。</p> <p>(共著者) 山本勝昭、遠藤俊郎、<u>山本章雄</u>、黒川貞生、亀山紘美 (担当部分) 全体構想および調査集計分析。 全日本ジュニア男子バレーボール選手10名および女子選手12名に対し、メンタルマネージメントに関する6項目、リーダーシップ行動に関する37項目、自己認知・他者認知に関する15項目、チーム効力感に関する16項目の質問を実施し、現状把握と今後の課題検討を試みた。その結果、リーダーシップ行動には、競技場面だけでなく社会的な支援を含んで期待を持っており、また、自己他者認知では男女ともに自他間にズレがあることが解った。若年のジュニア選手特有の心理状況が明らかになった。</p>
19 全日本ジュニア選手の心理 コンディショニングの変 化とその調整に関する研 究	共 著	1994.2	日本オリンピック 委員会スポーツ 医科学研究報告 No.III-1 P49-69	<p>(共著者) 遠藤俊郎、山本勝昭、<u>山本章雄</u>、亀山紘美、黒川貞生 (担当部分) 全体企画および調査集計分析。 第7回世界ジュニア選手権大会に参加した男子12名女子18名(合計30名)の選手に対して、大会前の合宿より大会に至る期間4回にわたり「POMSテスト」を実施し、リアルタイムで分析結果を指導者にフィードバックすることにより、心理支援の効果を検証した。その結果、ジュニア期の選手は心理的に不安定な状況に陥ることが多く、心理テストにより客観的なデータを得ることは非常に有効であり、今後も指導者と心理支援者が情報交換をしつつ質の高いサポートを行うことが必要であることが明らかになった。</p>
20 男女世界トップ4カ国に見 る技術パターン構成比に ついて	共 著	1994.2	日本体育協会ス ポーツ医科学研究報告 No.II-17 P247-253	<p>(共著者) 篠村朋樹、<u>山本章雄</u>、田口東、泉川喬一、福田隆、坂井充、渡部晴行、島津大宣、石井辰郎、永田俊和、梶尾義昭、亀山紘美 (担当部分) 全体構想および集計分析。</p>

著書, 学術論文等の名称	単著, 共著の 別	発行又は発表 の年月	発行所, 発表雑 誌等又は発表学 会等の名称	概 要
21 全日本ジュニア選手の心理 コンディショニングの変 化とその調整に関する研 究 (第二報)	共 著	1995.2	日本オリンピッ ク委員会スポ ーツ医科学研究報 告 No.III-2 P61-78	<p>バルセロナオリンピックで金・銀・銅メダルに輝いた男女チームを集めて実施された「1992 ワールドスパー4」大会において、男女それぞれ10試合合計20試合をVTRに録画し、各チームの得点構成比率を算出することにより、試合様相の違い、チーム特徴などの特定を試みた。この結果、オリンピックに優勝した男子ブラジル、女子キューバに同様な特徴が検出され、サーブ権のある時にはブロックポイントが多く、サーブ権のない時にアタックポイントが多くなっていた。これは、世界トップの試合ではブロック力が勝敗を左右する重要な技術であることを示したものと云える。</p> <p>(共著者) 遠藤俊郎、山本勝昭、<u>山本章雄</u>、<u>亀山紘美</u>、黒川貞生 (担当部分) 全体構想および調査集計分析。 1994年の第一報に引き続き、第7回アジアジュニア選手権大会に参加した男子12名女子20名(合計32名)の選手に対して、大会前の合宿より大会に至る期間4回にわたり「POMSテスト」を実施し、リアルタイムで分析結果を指導者にフィードバックすることにより、心理支援の効果を再度検証した。その結果、ジュニア期の選手は第一報でもふれたように、心理的に不安定な状況に陥ることが多く、指導者が客観的数値や視覚的な図表でこれを確認できる有効性がより一層検証できた。今後も理解ある指導者と心理支援者がこのシステム充実に向け情報交換を行うことが必要であることが示された。</p>
22 V I Sデータを利用した6 人制バレーボールのゲー ム分析	共 著	1995.2	日本体育協会ス ポーツ医科学研 究報告 No.II-18 P188-193	<p>(共著者) 田口東、<u>山本章雄</u>、泉川喬一、篠村朋樹、福田隆、坂井充、渡部晴行、島津大宣、石井辰郎、永田俊和、梶尾義昭、<u>亀山紘美</u> (担当部分) 全体構想および集計分析。 国際バレーボール連盟は、試合での選手の技術評価、優秀選手の表彰資料を得るため、また、マスコミ関係者への</p>

著書, 学術論文等の名称	単著, 共著の 別	発行又は発表 の年月	発行所, 発表雑 誌等又は発表学 会等の名称	概 要
23 地域における生涯学習体制の総合的研究—大学・自治体・民間の役割と連携—生涯スポーツ指導者に関する調査	共 著	1995.2	平成5・6年度科学研究費補助金研究成果報告書	<p>情報提供のため「V I S (Volleyball Information System)」を国際大会に於いて運用し、公式大会に於いては義務化している。ここから得られる生情報を加工し、外国チーム対策用の強化情報が入手できれば、世界各地で行われているライバルチームのスカウティングが非常に簡便になるとの目的から、本研究を行った。その結果、V I Sデータよりある程度V T R情報に近いものを作成することが可能であることが判明し、今後は、より確度の高い数理モデルの構築と、データ化できない情報の把握が必要であることが明らかとなった。</p> <p>(共著者) 中田順造、<u>山本章雄</u>、熊安貴美江、吉武信二、亀喜信 (担当部分) 全体構想および調査実施集計分析、執筆。</p> <p>スポーツ指導者資格取得の理由として、自己啓発的な「指導力を高める」と試行的な「スポーツが好きである」をあげる者が半数以上を占めた。一方、資格活用状況では、活用している者が6割を占めるものの、活用していない者も4割を占め、資格が必ずしも実際の指導に行かされていない現状が浮き彫りとなり、スポーツ資格制度の課題が指摘された。</p>
24 大阪府下の地域スポーツ指導者を対象とした指導の現状と「生涯スポーツ」分析 地域スポーツ指導者の実態に関する調査研究(1)	共 著	1995.3	大阪体育学研究 No.34 P27-36	<p>(共著者) 岩井俊夫、<u>山本章雄</u>、吉田雅行、吉武信二 (担当部分) 全体構想、集計、考察。</p> <p>生涯スポーツ指導者の現状把握と生涯スポーツに対する有資格指導者の意識について調べるため、質問紙を用いてアンケート調査を行い、統計処理によって、今後の問題点を検討した。結果、現状では指導者の一極集中型の指導になりがちで、「多様化した今日のスポーツ指導に対応しきれない様相が示された。また、生涯スポーツに対する意識としては、レクリエーション的なスポーツ活動との認識が高く、年齢層も幅広いと捉えていることが示された。</p>
25 日本男子チームの体力の推移について	共 著	1996.2	日本体育協会スポーツ医科学研究	<p>(共著者) 柏森康雄、宮内一三、白井徹男、津田佳弘、<u>亀山紘美</u>、原巖、<u>山</u>、</p>

著書, 学術論文等の名称	単著, 共著の 別	発行又は発表 の年月	発行所, 発表雑 誌等又は発表学 会等の名称	概 要
オリムピック毎の比較について			<p>究報告 No. II-19 P126-130</p>	<p>本章雄、田中博明、清川勝行、泉川喬一、森田淳悟、橋爪裕、南匡泰 (担当部分) 全体構想および資料収集、集計。 オリムピックに出場した全日本男子チームの体力測定結果を、1964年の東京大会から1996年アトランタ大会まで収集し、縦断的に検証することによりその推移と問題点、そして今後の課題を探ることを目的とした。この結果、身長面では横ばい状態が続いており、大型化してきている世界とは平均5.4 cmの開きがあった。筋力、ジャンプ力はここ15年間横ばいであり、強化トレーニングの成果が表れていなかった。一方、スピード、敏捷性は今年が最高値であり、トレーニング効果が顕著となっていた。今後は、高さを確保するため、最高到達点を上昇させる戦略が体力づくりに必要であることが判明した。</p>
26 バレーボールにおけるジャンプ頻度とジャンプインターバルに関する研究	共 著	1999.2	<p>日本体育協会スポーツ医科学研究報告 No. II-22 P124-130</p>	<p>(共著者) 宮内一三、柏森康雄、南匡泰、亀山紘美、白井徹男、津田佳弘、田中博明、中島克典、原巖、<u>山本章雄</u>、橋爪裕、 (担当部分) 全体構想および集計分析、考察。 試合場面で選手は、自らの最高のジャンプ力を最後まで維持させることを要求される。これを実現化するためには、日頃より試合に即した練習、トレーニングを行うことが必要となる。本研究では、実際の試合をVTRで撮影し、ジャンプの種類、頻度、間隔などを記録することにより、合理的なトレーニング構築に必要な基礎資料を得た。その結果、ポジションによって偏差があるものの1試合の最高ジャンプ回数はセンターの450回であり、ジャンプの間隔はインプレー中約4秒、サーブを挟むと18.5秒となっていた。</p>
27 日本におけるバレーボールの文献について	単 著	1999.2	<p>日本バレーボール協会科学研究委員会研究報告集 No. VI</p>	<p><u>山本章雄</u> 日本において発表されたバレーボールに関する研究論文のうち、1931年から1999年までに刊行されたもの、大学・研究所の紀要679件、各種学会</p>

著書, 学術論文等の名称	単著, 共著の 別	発行又は発表 の年月	発行所, 発表雑 誌等又は発表学 会等の名称	概 要
28 生涯の健康管理における身体運動データの活用 (1) 呼気ガス分析を用いて	共 著	2015.6	P344-466 平成 27 年度大阪府立大学高等教育研究機構プロジェクト型研究報告書	<p>の研究誌 213 件、日本体育学会関係 555 件、合計 1,447 件の論文を収集し、「論文題目」「著者名」「雑誌名」「巻号数」「掲載頁数」「発表分野」などを一覧にし発表年順に目録を作成した。</p> <p>(共著者) 坪内伸司、<u>山本章雄</u>、松浦義昌、吉井泉 (担当部分) 全体の研究計画および考察。 現代のライフスタイルは IT 化の進展、労働の省力化、人間関係の希薄化、などのより大きく変化しており健康生活にも多大な影響を及ぼしている。本研究では、客観的指標により健康生活の状況を把握するため呼吸代謝、消費エネルギー量などの測定を実施し、これと生活行動の関係性を検証した。この結果、日常生活が規則正しく行われていることが測定値の安定に連関していることが認められた。</p>
29 新システムによる視覚機能の総合測定及びトレーニングとその評価	共 著	2016.6	平成 28 年度大阪府立大学高等教育研究機構プロジェクト型研究報告書	<p>(共著者) 吉井泉、坪内伸司、<u>山本章雄</u> (担当部分) 全体の研究計画立案および考察。 視機能を測定するシステムの開発は近年大きく進展しており、最新のシステムを用いて静止視力、DVA 動体視力、眼手協応動作、深視力を測定し、運動選手の身体トレーニングとの関係性を見ることは有意義である。本研究では視機能と運動学習能力を指標に測定を行った結果、視機能が優れている者が運動学習においても優位である傾向がうかがえた。</p>
30 放射線ホルミシス環境下における生活習慣の改善	共 著	2017.6	第 55 回日本放射線腫瘍学会生物部会学術大会報告書 P49-50	<p>(共著者) 清水教永、坪内伸司、<u>山本章雄</u>、内田勇人 (担当部分) 全体の研究計画監修。 物質の低用量での使用が誘発的な現象を引き起こすことを「ホルミシス」という。本研究では、微量の放射線暴露が引き起こすこの現象について検証を行った。その結果、低線量放射線ホルミシスを長期間暴露することで抗酸化物の誘導、血中活性酸素量の減少、唾液の免疫ホルモンの増加傾向が検出された。</p>

